

文学館だより

平成29年 2月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 68-9511
文責 日高

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春のはじめの雨にあらずや

「くろ土」 収録

歌の意味

しみじみと今日降っている雨は、まだ二月とはいえ、春のはじめの雨ではないだろうか。

歌の背景

牧水が35歳になった大正8年の2月、東京の巣鴨の自宅での作である。声に出して読んでみるとよく分かるが、じつに調べのよい歌である。牧水調と言われる牧水後期の歌風はこのころに成立した。牧水は季節を先から先に感じる人であり、そのことに喜びを感じる人であったが、そのことをよく示している一首である。（伊藤一彦著『命の碎片』より）

2月企画展のお知らせ

2月18日（土）～4月23日（日）

第2歌集『独り歌へる』を読む

前企画、喜志子展はいかがだったでしょうか。

2月18日（土）より『独り歌へる』展に入れ替わります。

喜志子から大恋愛の相手、園田小枝子に時代を戻します。

牧水は、明治40年に小枝子と出逢います。この上ない至福の時と同じくして、第2歌集『独り歌へる』は編まれていきました。

小鳥よりさらに身かろくうつくしく^{かな}哀しく春の木の^{かな}間ゆく君

わが妻はつひにうるはし夏たてば白き^{きぬ}衣きてやや瘦せてけり

牧水の中では小枝子はすでに「妻」だったのですね。大学を卒業した牧水は小枝子との新居を借りますが、小枝子はやってきません。小枝子は二人の子をもつ人妻。牧水に応えることはありませんでした。

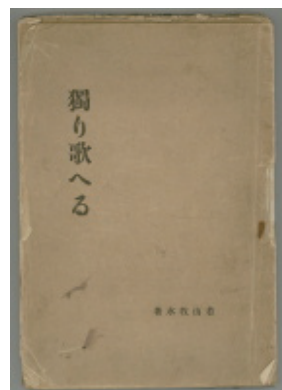
次第に、歌の色調も変化していきます。

物ありて^{いちにん}追はるるごとく一人の男きたりぬ海^{うみ}のほとりに

うしなひし夢をさがしにかへりゆく若きいのちのそのうしろかげ

『独り歌へる』自序（抜粋）

私は常に思つて居る、人生は旅である、我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ、その間の一步々々の歩みは実にその時のみの一步々々で、一度往いては再びかへらない、私は私の歌を以て私の旅のその一步々々のひびきであると思ひなして居る、云ひ換へれば私の歌はその時々^{とき}の私の命の碎片である。



第21回 若山牧水賞 吉川宏志氏 受賞 ～ 県内出身者初受賞 ～

第21回若山牧水賞に、初の宮崎県出身者、歌人吉川宏志氏の第7歌集『鳥の見しもの』が選ばれました。

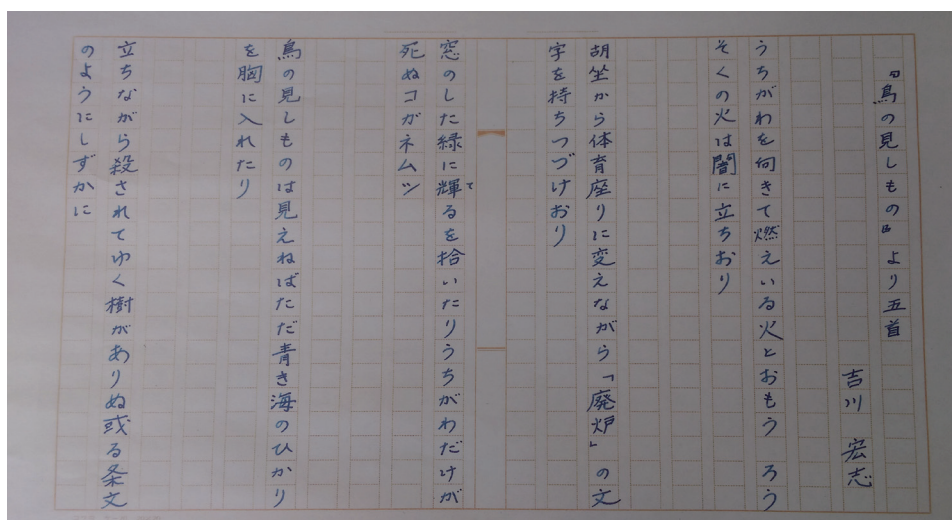
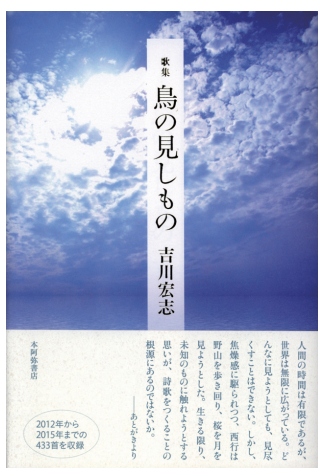
「あこがれの賞をいただき、本当にうれしく思います。18歳まで宮崎で育ちました。牧水が歌に詠んだ宮崎の海や山や川は自分の言葉や感性に強い影響を与えているように思います。これからも自然を心の底に置きつつ、歌っていきたい。故郷で私を支えてくれた人たちに心から感謝します。」と喜びのコメントを寄せています。(タリデイリー掲載)

ご存知の方も多いかと思いますが、吉川さんは越表で生まれ、3歳までこちらで過ごされました。

受賞式後のスケジュールもいっぱいですが、文学館へのお越しを楽しみにしています。



吉川宏志氏



自選5首 吉川氏直筆原稿

第21回若山牧水賞関連行事

のごあんない

授賞式 2/7 (火) 14:30～ 宮崎観光ホテル (申込は締切しました)

受賞記念講演会 2/8 (水) 15:00～ 日向市中央公民館

会場まで無料送迎バスが出ます

【行き】 14:00 道の駅とうごう 出発

【帰り】 17:00 道の駅とうごう 到着予定

乗車希望の方は日向市文化生涯学習課 (電話 52-2111) までご連絡ください
文学館 (68-9511) でもかまいません。

文学館には 2/8 (水) 講演会前にお立ち寄りいただきます。
毎年、受賞者にはご来館いただき、受賞歌集にサインをいただいています。
翌9日 (木) は懐かしの越表をご両親そろって訪問される予定です。
45年ぶりの来訪とあって、越表地区あげての歓迎会となることでしょう。
記念植樹も計画されているようです。

授賞式のような、文学館ご来館のような、生コメントなどは来月号でお届けする予定です。タイミングよく取材できるのですが・・・
多少のプレッシャーを感じつつ、当日を楽しみに待つこととします。